

「電磁気学」第5章問題解答

5-1 ドリル問題

1.

式5-1より, $F = lIB = 2 \times 100 \times 10 = 2 \times 10^3 \text{ N}$ (答)

2.

式5-3を使って, $N = l^2 IB \cos \theta = 0.2^2 \times 2 \times 1 \times \cos \theta = 0.08 \cos \theta \text{ [Nm]}$

(答) $\theta = 0$ で $N = 0.08 \text{ Nm}$, $\theta = 45^\circ$ で $N = 0.08 / \sqrt{2} = 0.057 \text{ Nm}$,
 $\theta = 90^\circ$ で $N = 0 \text{ Nm}$

3.

式5-6を使って, $\phi = BS \cos \theta = 0.1 \times 0.1^2 \times \cos \theta = (\cos \theta) \times 10^{-3} \text{ [Wb]}$ 。この式に θ の値を代入して求める。

(答) $\theta = 0$ で $\phi = 10^{-3} \text{ Wb}$, $\theta = 45^\circ$ で $\phi = 7.1 \times 10^{-4} \text{ Wb}$, $\theta = 90^\circ$ で $\phi = 0 \text{ Wb}$,
 $\theta = 150^\circ$ で $\phi = -8.7 \times 10^{-4} \text{ Wb}$

4.

磁束密度の法線ベクトル成分が回路を縁とする平面の法線ベクトルの方向と逆向きである。

5.

回路の法線ベクトルの向きを磁束密度の向きと一致するように定義すると、

$\phi = \int \mathbf{B} \cdot \mathbf{ndS} = BS = \pi a^2 B \text{ [Wb]}$ である。(答)

6.

円筒形で面積分をすると、円筒形の側面では、面の法線方向と磁束密度は直交するから、

$\phi = \int \mathbf{B} \cdot \mathbf{ndS} = \pi a^2 B + 0 \times 2\pi ah = \pi a^2 B \text{ [Wb]}$ となり、5.と同じ結果が得られる。(答)

7.

磁束は時間変化しないから、磁束の時間微分はゼロ。起電力は生じない。(答)

8.

式5-5より, $V_e = -N \frac{d\phi}{dt} = -20 \times \frac{d(0.1t + 0.05t^2)}{dt} = -(2 + 2t) \text{ [V]}$ である。 $t = 2 \text{ s}$ では、

$V_e = -(2 + 2 \times 2) = -6 \text{ V}$ 。磁束の増加を妨げる向きに 6 V の起電力が生じる。(答)

9.

誘導起電力は $V_e = -0.1 \times 300 \cos(300t) = -30 \cos(300t) \text{ [V]}$ である。時間を横軸、縦軸に磁束と起電力を取って、時間変化のようすを描けばよい。

10.

$$\phi = 0.05 \times \pi \times (0.1)^2 + 0.1 \times \pi \times [(0.2)^2 - (0.1)^2] \approx 0.011 \text{ [Wb]} \quad (\text{答})$$

5-2 ドリル問題

1.

$$V_e = -\frac{d(Bl^2)}{dt} = -B_0 l^2 \omega \cos \omega t \text{ [V]} \quad (\text{答})$$

2.

$$\text{最大値は } B_0 l^2 \omega = 0.3 \times 0.2^2 \times 300 = 3.6 \text{ V} \quad (\text{答})$$

3.

回路を貫く磁束は $Bl^2 \cos \theta$ であるから、 $V_e = -B_0 l^2 \cos \theta \times \omega \cos \omega t$ 。

$$\text{最大値は } B_0 l^2 \omega \cos \theta = 0.3 \times 0.2^2 \times 300 \times \cos(\pi/4) = 2.5 \text{ V} \quad (\text{答})$$

4.

$$\text{式 5-2 1 から } |V_e| = Blv = 1.5 \times 2 \times (40 \times 10^3 / 3600) = 33 \text{ V} \quad (\text{答})$$

5.

$$\text{式 5-2 3 から } V_e = -v[B(x+L_x) - B(x)]L_y = -v\left(\frac{A}{x+L_x} - \frac{A}{x}\right)L_y = \frac{vAL_x L_y}{x(x+L_x)} \text{ [V]} \quad (\text{答})$$

6.

$$\text{電界の大きさは } |E| = |\mathbf{v} \times \mathbf{B}| = vB \sin \theta = 10 \times 1.5 \times \sin(\pi/2) = 15 \text{ V/m} \quad (\text{答})$$

7.

磁束密度は一様であるから、回路を貫く磁束の時間変化はない。したがって、誘導起電力

はゼロ。(答)

8.

回路を貫く磁束は $\phi = BS \cos \omega t$ 。これから、 $|V_e| = BS\omega \sin \omega t$ となるから、誘導起電力の最大値は $BS\omega = 0.2 \times 0.1^2 \times 350 = 0.7 \text{ V}$ (答)

9.

電荷の速度がゼロのとき、ローレンツ力はゼロ。電荷が導線中を動いている場合もその速度の向きは回路の接線方向だから、発生するローレンツ力は導線に沿った方向とは直角。したがって、導線に沿った方向のローレンツ力は常にゼロである。(答)

10.

式5-30 から導線に沿った方向のローレンツ力がゼロであるから、この方向の電界成分はゼロ。したがって、誘導起電力は生じない。(答)

5-3 ドリル問題

1.

式5-34 より回路に沿って電界を線積分すると誘導起電力が得られる。

$$V_e = \int_a^b E ds + \int_b^c E ds + \int_c^d E ds + \int_d^a E ds = 4El \text{ となる。 (答)}$$

2.

$$V_e = 4 \times 10 \times 0.5 = 20 \text{ V} \text{ (答)}$$

3.

$V_e = E \times (2\pi r)$ より導体内の電界は

$$E = \frac{V_e}{2\pi r} = \frac{10}{2 \times 3.14 \times 0.2} \approx 8.0 \text{ V/m} \text{ (答)}$$

4.

式5-35 より $2\pi r E = -\frac{dB}{dt} \pi r^2$ の関係が得られる。これから $E = \frac{B_0 \omega r \sin \omega t}{2}$ である。(答)

5.

導体を5回巻いてあることを考慮して、前問の結果を使うと電界は

$$E = \frac{5 \times 0.5 \times 300 \times 0.2 \times \sin(300t)}{2} = 75 \sin(300t) \text{ [V/m]} \text{ で時間変化する。 (答)}$$

6.

磁束密度は z 方向を向いているから、 $\mathbf{E} = \mathbf{v} \times \mathbf{B}$ より y 方向に $E_y = -vB = -vAx$ の電界が生じている。回路に沿った方向の電界の値は、 x 軸に平行な辺ではゼロである。 y 軸に平行な辺では、 $-vAx$ と $-vA(x+L)$ である。 (答)

7.

$$E = -\frac{r}{2} \frac{d}{dt}(0.05t) = -\frac{0.2 \times 0.05}{2} = -0.005 \text{ V/m} \quad (\text{答})$$

8.

$t=0$ で $E = -\frac{\mu_0 n I_0 \omega a^2}{2r}$, $t = \frac{\pi}{2\omega}$ で $E = 0$, $t = \frac{\pi}{\omega}$ で $E = \frac{\mu_0 n I_0 \omega a^2}{2r}$ である。これらの結果を使えばよい。縦軸に $E / (\frac{\mu_0 n I_0 \omega a^2}{2})$, 横軸に r をとれば、誘導電界の r 依存性を容易にグラフに表すことができる。

9.

$r > a$ では、 $2\pi r E = -\frac{\partial B}{\partial t} \pi r^2$ の関係が得られる。これより、

$$E = -\frac{r}{2} \frac{\partial B}{\partial t} = -\frac{\mu_0 n I_0 \omega r}{2} \cos \omega t \text{ となる。 (答)}$$

10. $\text{rot} \mathbf{E} = \frac{\partial E_z(y)}{\partial y} \mathbf{e}_x = -\frac{\partial B}{\partial t}$ より $\frac{\partial E_z}{\partial y} = -\frac{\partial B_x}{\partial t}$ (答)

5-4 ドリル問題

1.

式 5-68 に数値を代入して、 $L = 4\pi \times 10^{-7} \times 500^2 \times 0.5 \times 0.05 \approx 7.85 \times 10^{-3} \text{ H}$ (答)

2.

式 5-68 の μ_0 を $5000\mu_0$ にすればよいから、 $L = 5000 \times 7.85 \times 10^{-3} \approx 39.3 \text{ H}$ (答)

3. (この問題は第3刷以降では削除しました。第1, 2刷のみ掲載)

この問題では、導線の太さを考慮する必要がある。導線の断面を半径 b の円であるとする。

電流はこの断面を一様な電流密度 $J = \frac{I}{\pi b^2}$ で流れている。式 5-10 と式 4-61 で導入した

ベクトルポテンシャルを使って、導体内に取った閉曲線 c_1 を貫く磁束 ϕ_1 を求めると、

$$\phi_1 = \int \mathbf{B} \cdot \mathbf{ndS}_1 = \int \text{rot} \mathbf{A} \cdot \mathbf{ndS}_1 = \int_{c_1} \mathbf{A}(\mathbf{R}_1) \cdot \mathbf{ds}_1 \text{ である。 } \mathbf{A}(\mathbf{R}_1) \text{ は、閉曲線 } c_1 \text{ 上の点 } \mathbf{R}_1 \text{ での}$$

ベクトルポテンシャルである。電流密度が導線の断面積 D_2 に一様に分布しているとする、

$$\text{式 4-63 から } \mathbf{A}(\mathbf{R}_1) = \frac{\mu_0}{4\pi} \frac{I}{\pi b^2} \int_{D_2} dD_2 \int_{c_2} \frac{\mathbf{ds}_2}{|\mathbf{R}_1 - \mathbf{R}_2|} \text{ である。したがって、閉曲線 } c_1 \text{ を貫く}$$

$$\text{磁束は } \phi_1 = \int_{c_1} \mathbf{A}(\mathbf{R}_1) \cdot \mathbf{ds}_1 = \frac{\mu_0}{4\pi} \frac{I}{\pi b^2} \int_{D_2} dD_2 \iint_{c_1 c_2} \frac{\mathbf{ds}_1 \cdot \mathbf{ds}_2}{|\mathbf{R}_1 - \mathbf{R}_2|} \text{ である。この式を断面について平}$$

均すれば、回路の導線を貫く磁束 ϕ が得られる。したがって、自己インダクタンスは

$$L = \frac{\phi}{I} = \frac{1}{I} \frac{1}{\pi b^2} \int_{D_1} \phi_1 dD_1 = \frac{\mu_0}{4\pi} \frac{1}{(\pi b^2)^2} \int_{D_1} dD_1 \int_{D_2} dD_2 \iint_{c_1 c_2} \frac{\mathbf{ds}_1 \cdot \mathbf{ds}_2}{|\mathbf{R}_1 - \mathbf{R}_2|} \text{ となる。導体断面の中心}$$

からの距離 r と角度 θ および導線方向のふれ角 φ 使って、位置ベクトル \mathbf{R}_1 を表すと、

$$\mathbf{R}_1 = ((a + r_1 \cos \theta_1) \cos \varphi_1, (a + r_1 \cos \theta_1) \sin \varphi_1, r_1 \sin \theta_1) \text{ である。 } \mathbf{R}_2 \text{ も同様である。この座}$$

標を使うと $dD_1 = r_1 d\theta_1 dr_1$, $dD_2 = r_2 d\theta_2 dr_2$ である。また、

$$l_1 = a + r_1 \cos \theta_1, l_2 = a + r_2 \cos \theta_2 \text{ で } l_1 \text{ と } l_2 \text{ を定義すると } \mathbf{ds}_1 \cdot \mathbf{ds}_2 = \cos(\varphi_1 - \varphi_2) l_1 d\varphi_1 l_2 d\varphi_2$$

である。以上から、自己インダクタンスを与える式は

$$L = \frac{\mu_0}{4\pi} \frac{1}{(\pi b^2)^2} \int_0^{2\pi} \int_0^{2\pi} \int_0^b \int_0^b \int_0^{2\pi} \int_0^{2\pi} \frac{\cos(\varphi_1 - \varphi_2) l_1 d\varphi_1 l_2 d\varphi_2 r_1 dr_1 d\theta_1 r_2 dr_2 d\theta_2}{\sqrt{l_1^2 + l_2^2 - 2l_1 l_2 \cos(\varphi_1 - \varphi_2) + z^2}}$$

となる。ここで、 $z = r_1 \sin \theta_1 - r_2 \sin \theta_2$ である。変数 φ_1 と φ_2 を $\varphi = \varphi_1 - \varphi_2$ と φ_2 に変数変換

すると、 φ_2 に関する積分は実行できて、 2π となる。したがって、

$$L = \frac{\mu_0}{2} \frac{1}{(\pi b^2)^2} \int_0^b \int_0^{2\pi} \int_0^b \int_0^{2\pi} \left[\int_0^{2\pi} \frac{\cos \varphi}{\sqrt{l_1^2 + l_2^2 - 2l_1 l_2 \cos \varphi + z^2}} d\varphi \right] l_1 l_2 r_1 dr_1 d\theta_1 r_2 dr_2 d\theta_2$$

である。この式を数値積分などで計算すれば自己インダクタンスの値を求めることができる。

(答)

3. (第1, 2刷では4.)

$$\text{式 5-63 から } M = \frac{\pi \mu r_2^2}{2r_1} = \frac{5000 \pi \mu r_2^2}{2r_1} \text{ [H] である。 (答)}$$

4. (第1, 2刷では5.)

$$\phi_{12} = M_{12} I_2, \phi_{21} = M_{21} I_1, M_{12} = M_{21} = M \text{ より, } \phi_{12} = M I_2 = \frac{5000 \pi \mu r_2^2}{2r_1} I_2 \text{ (答)}$$

5. (第1, 2刷では6.)

$$V_2 = -\frac{N_2}{N_1}V \text{ より } \frac{100}{1000} = \frac{N_2}{N_1} \text{ となるから, } N_1 = 10N_2 \text{ とすればよい. (答)}$$

7. (この問題は第3刷以降では削除しました。第1, 2刷のみ掲載)

導線の断面の半径を $b = 5$ [mm] としよう。この場合 $b \ll a$ である。この条件が成り立つ場合には、前問3の L を求める積分を初等関数で表すことができる。

まず φ に関する積分を実行しよう。変数 $u = (\varphi + \pi)$ を使うと、 $\cos \varphi = 2 \sin u - 1$ である。

$$k^2 = \frac{4l_1l_2}{(l_1+l_2)^2+z^2} \text{ を導入すると}$$

$$\int_0^{2\pi} \frac{\cos \varphi d\varphi}{\sqrt{l_1^2+l_2^2-2l_1l_2\cos\varphi+z^2}}$$

$$= \frac{4}{\sqrt{(l_1+l_2)^2+z^2}} \left[\frac{2-k^2}{k^2} \int_0^{\frac{\pi}{2}} \frac{du}{\sqrt{1-k^2\sin^2 u}} - 2 \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sqrt{1-k^2\sin^2 u} du \right]$$

と書き直せる。ここで、 $b \ll a$ の条件を使うと $(l_1+l_2)^2+z^2 \approx 4a^2$ および $l_1 \approx l_2 \approx a$ であるから、 k は1に近い。そこで $1-k^2 = \varepsilon^2$ ($|\varepsilon| = 1$) とおくと

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \frac{du}{\sqrt{1-k^2\sin^2 u}} = \int_0^{\frac{\pi}{2}} \frac{du}{\sqrt{\cos^2 u + \varepsilon^2 \sin^2 u}} \approx \int_0^{\frac{\pi}{2}-\delta} \frac{du}{\sqrt{\cos^2 u}} + \int_{\frac{\pi}{2}-\delta}^{\frac{\pi}{2}} \frac{du}{\sqrt{\cos^2 u + \varepsilon^2 \sin^2 u}}$$

$$= \int_0^{\frac{\pi}{2}-\delta} \frac{du}{\cos u} + \int_0^{\delta} \frac{d\theta}{\sqrt{\cos^2 \theta + \varepsilon^2 \sin^2 \theta}} \approx \int_0^{\frac{\pi}{2}-\delta} \frac{du}{\cos u} + \int_0^{\delta} \frac{d\theta}{\sqrt{\theta + \varepsilon^2}}$$

である。ここで、 $\varepsilon = \delta = 1$, $\theta = \frac{\pi}{2} - u$ として、近似式 $\sin \theta \approx \theta$, $\cos \theta \approx 1$ を使った。こ

の式の右辺の第1項の積分は

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}-\delta} \frac{du}{\cos u} = [\log \tan(\frac{u}{2} + \frac{\pi}{4})]_0^{\frac{\pi}{2}-\delta} = \log \tan(\frac{\pi}{2} - \frac{\delta}{2}) = \log[\cos \frac{\delta}{2} / \sin \frac{\delta}{2}] \approx \log \frac{2}{\delta} \text{ となる。}$$

$$\text{第2項は } \int_0^{\delta} \frac{d\theta}{\sqrt{\theta + \varepsilon^2}} = [\log(\theta + \sqrt{\theta^2 + \varepsilon^2})]_0^{\delta} = \log \frac{\delta + \sqrt{\delta^2 + \varepsilon^2}}{\varepsilon} \approx \log \frac{2\delta}{\varepsilon} \text{ となるから,}$$

$$\int_0^{\frac{\pi}{2}} \frac{du}{\sqrt{1-k^2\sin^2 u}} \approx \log \frac{2}{\delta} + \log \frac{2\delta}{\varepsilon} = \log \frac{4}{\sqrt{1-k^2}} = \log \frac{8a}{\sqrt{(l_1-l_2)^2+z^2}} \text{ が得られる。また,}$$

$$k \approx 1 \text{ から } \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sqrt{1-k^2\sin^2 u} du \approx \int_0^{\frac{\pi}{2}} \sqrt{1-\sin^2 u} du = 1 \text{ である。したがって,}$$

$$\int_0^{2\pi} \frac{\cos \varphi d\varphi}{\sqrt{l_1^2 + l_2^2 - 2l_1l_2 \cos \varphi + z^2}} \approx \frac{2}{a} \left[\log \frac{8a}{\sqrt{(l_1 - l_2)^2 + z^2}} - 2 \right]$$

$$= \frac{2}{a} \left[\log \frac{8a}{\sqrt{r_1^2 + r_2^2 - 2r_1r_2 \cos(\theta_1 - \theta_2)}} - 2 \right]$$

である。この結果を L の式に代入し、 $l_1 \approx l_2 \approx a$ を考慮すると、

$$L \approx \frac{\mu_0 a}{(\pi b^2)^2} \int_0^b \int_0^{2\pi} \int_0^b \int_0^{2\pi} \left[\log \frac{8a}{\sqrt{r_1^2 + r_2^2 - 2r_1r_2 \cos(\theta_1 - \theta_2)}} - 2 \right] r_1 dr_1 d\theta_1 r_2 dr_2 d\theta_2$$

$$= \frac{\mu_0 a}{(\pi b^2)^2} 2\pi \int_0^b \int_0^b \left\{ \int_0^{2\pi} \left[\log(8a) - 2 - \frac{1}{2} \log(r_1^2 + r_2^2 - 2r_1r_2 \cos \theta) \right] d\theta \right\} r_1 r_2 dr_1 dr_2$$

が得られる。ここで、 $\theta = \theta_1 - \theta_2$ である。積分公式によると、 $r_1 \geq r_2$ のとき

$$J(r_1, r_2) \equiv \int_0^{2\pi} \log(r_1^2 + r_2^2 - 2r_1r_2 \cos \theta) d\theta = 4\pi \log r_1 \text{ である。積分領域を } r_1 \geq r_2 \text{ を満たすよ$$

うに変更すると、

$$\int_0^b \int_0^b J(r_1, r_2) r_1 dr_1 r_2 dr_2 = 2 \int_0^b \int_0^{r_1} r_2 dr_2 J(r_1, r_2) r_1 dr_1 = 8\pi \int_0^b \int_0^{r_1} r_2 dr_2 (\log r_1) r_1 dr_1$$

$$= 8\pi \int_0^b \left[\frac{1}{2} r_2^2 \right]_0^{r_1} (\log r_1) r_1 dr_1 = 4\pi \int_0^b (\log r_1) r_1^3 dr_1 = 4\pi b^4 \left(\frac{\log b}{4} - \frac{1}{16} \right)$$

となる。ここで、積分公式 $\int_0^b r^3 \log r dr = b^4 \left(\frac{\log b}{4} - \frac{1}{16} \right)$ を使った。したがって、

$$L \approx \frac{\mu_0 a}{(\pi b^2)^2} 2\pi \times \left[2\pi \frac{b^4}{4} (\log 8a - 2) - \frac{1}{2} 4\pi b^4 \left(\frac{\log b}{4} - \frac{1}{16} \right) \right] = \mu_0 a \left[\log \frac{8a}{b} - \frac{7}{4} \right] \text{ の関係が得}$$

られる。すなわち、 $b \ll a$ では、自己インダクタンスは $L \approx \mu_0 a \left[\log \frac{8a}{b} - \frac{7}{4} \right]$ と表される。

得られた式に数値を代入すると、

$$L \approx 4\pi \times 10^{-7} \times 0.2 \times \left[\log(8 \times 0.2 / 0.005) - 7/4 \right] \approx 1.0 \times 10^{-6} \text{ [H] となる。これから、磁}$$

$$\text{界のエネルギーは } U = \frac{1}{2} LI^2 \approx 0.5 \times 1.0 \times 10^{-6} \times 10^2 = 0.5 \times 10^{-4} \text{ [J] である。 (答)}$$

6. (第1, 2刷では8.)

$$U = \left(\frac{1}{2} L_1 + \frac{1}{2} L_2 + M \right) I^2 = \left(\frac{1}{2} \times 0.1 + \frac{1}{2} \times 0.5 + 0.2 \right) \times 2^2 = 2 \text{ J (答)}$$

7. (第1, 2刷では9.)

相互インダクタンスによって蓄えられたエネルギーは

$$MI_1 I_2 = \frac{\mu_0 \pi r_2^2}{2r_1} I_1 I_2 = \frac{4\pi \times 10^{-7} \times \pi \times 0.01^2}{2 \times 0.5} \times 1 \times 3 \approx 1.2 \times 10^{-9} \text{ J である。}$$

8. (第1, 2刷では10.)

直列接続であるから自己インダクタンスの和を取ればよい。合成インダクタンスは $2L$ である。(答)

5-5 ドリル問題

1.

単位の関係は $[H]=[J/A^2]$, $[\Omega]=[J/A^2s]$ であるから, $[H/\Omega]=[(J/A^2)/(J/A^2s)]=[s]$ となる。したがって, H と Ω の比 H/Ω は秒である。(答)

2.

$$\frac{L}{R} = \frac{0.2}{3} \approx 0.067 \text{ s} \quad (\text{答})$$

3.

スイッチを入れた瞬間の電流はオームの法則から $\frac{V}{R} = \frac{6}{3} = 2 \text{ A}$ である。時刻 $t = 10 \text{ s}$ では,
 $I = I(0)\exp(-t/(L/R)) = 2 \times \exp(-10/0.067) \approx 0.0$ となる。すなわち, 電流はゼロである。(答)

4.

直列接続であるから, 合成インダクタンスは $0.4 + 0.1 = 0.5 \text{ H}$ である。(答)

5.

式5-99より, 並列接続したコイルの合成インピーダンス L は $\frac{1}{L} = \frac{1}{0.2} + \frac{1}{0.4} = 7.5 \text{ H}^{-1}$ の

関係を満たすから, $L \approx 0.13 \text{ H}$ が得られる。(答)

6.

単位の関係は $[F]=[(As)^2/J]$, $[H]=[J/A^2]$ より $[FH]=[(As)^2/J] \times [J/A^2]=[s^2]$. したがって $[(HF)^{\frac{1}{2}}]=[s]$ である。すなわち, \sqrt{LC} は秒の単位を持つ。(答)

7.

式5-104から, $\omega = \frac{1}{\sqrt{LC}} = \frac{1}{\sqrt{10 \times 10^{-6} \times 0.1}} = 10^3 \text{ s}^{-1}$ である。(答)

8.

式 5-106 から、最大電荷は $VC = 10 \times 5 \times 10^{-6} = 5 \times 10^{-5} \text{ C}$ である。(答)

9.

$$U = \frac{1}{2} CV^2 = 5 \times 10^{-6} \times 10^2 / 2 = 2.5 \times 10^{-4} \text{ J} \quad (\text{答})$$

10.

$$Q(t) = CV \sin \omega t = 5 \times 10^{-5} \sin(1000t) \text{ [C]},$$

$$I(t) = \frac{dQ}{dt} = CV \omega \cos \omega t = 5 \times 10^{-2} \cos 1000t \text{ [A]} \text{ である。}$$

これから、時間 t を横軸に、電荷と電流を縦軸にとってグラフを描けばよい。

5-6 ドリル問題

1.

$$\dot{V} = V_0 e^{j(\omega t + \alpha)} = V_0 [\cos(\omega t + \alpha) + j \sin(\omega t + \alpha)] \text{ より}$$

$\text{Re}[\dot{V}] = V_0 \cos(\omega t + \alpha)$ となり、式 5-130 と一致する。(答)

2.

$$\omega = 2\pi f \text{ より } \omega = 2\pi \times 50 \approx 314 \text{ rad/s} \text{ である。} (\text{答})$$

3.

$$\frac{V_0}{\sqrt{2}} = 110 \text{ であるから最大電圧は } V_0 \approx 156 \text{ V} \text{ となる。} (\text{答})$$

4.

抵抗を流れる電流の実効値は 10 A である。式 5-129 より

$$\bar{P} = \frac{I_0 V_0}{2} = \left(\frac{I_0}{\sqrt{2}}\right) \left(\frac{V_0}{\sqrt{2}}\right) = 100 \times 10 = 10^3 \text{ W} \text{ である。} (\text{答})$$

5.

$$\dot{Z} = R - j \frac{1}{\omega C} \quad (\text{答})$$

6.

$$\tan \phi = -\frac{1}{\omega RC} \quad (\text{答})$$

7.

$$\text{電流の最大値は } \frac{V_0}{\sqrt{R^2 + \left(-\frac{1}{\omega C}\right)^2}} = \frac{\sqrt{2} \times 110}{\sqrt{20^2 + \left(\frac{1}{300 \times 10 \times 10^{-6}}\right)^2}} \approx 0.47 \text{ A} \quad (\text{答})$$

8.

$$Z = \sqrt{R^2 + \left(\omega L - \frac{1}{\omega C}\right)^2} = \sqrt{5^2 + \left(300 \times 5 \times 10^{-3} - \frac{1}{300 \times 5 \times 10^{-6}}\right)^2} \approx 665 \Omega \quad (\text{答})$$

9.

$$\tan \phi = \frac{\omega L - \frac{1}{\omega C}}{R} \approx -\frac{665}{5} \approx -133 \text{ より } \phi \approx -89.6^\circ \quad (\text{答})$$

10.

縦軸に虚数軸、横軸に実数軸をとる。前問9から、この座標軸の横軸に 5Ω 、縦軸の負の向きに 665Ω をとって求めた点と座標軸の原点を結べばよい。

5-7 ドリル問題

1.

$$\text{有効電力} = \sqrt{400^2 - 200^2} \approx 346 \text{ W} \quad (\text{答})$$

2.

$$\text{最大電流は } I_0 = \frac{V_0}{Z} = \frac{V_0}{\sqrt{R^2 + (\omega L)^2}} = \frac{200}{\sqrt{50^2 + (300 \times 0.1)^2}} = \frac{200}{\sqrt{3400}} \approx 3.43 \text{ A},$$

$$\text{力率は } \cos \phi = \frac{R}{Z} \approx \frac{50}{58.3} \approx 0.857,$$

$$\text{消費電力は } \frac{I_0 V_0}{2} \cos \phi \approx \frac{3.43 \times 200}{2} \times 0.857 \approx 294 \text{ W} \quad (\text{答})$$

3.

$$\cos \varphi = \frac{R}{\sqrt{R^2 + \left(\frac{1}{\omega L}\right)^2}} = \frac{20}{\sqrt{20^2 + \left(\frac{1}{1000 \times 10 \times 10^{-6}}\right)^2}} \approx 0.196 \quad (\text{答})$$

4.

$$Z = \sqrt{50^2 + (300 \times 0.05)^2} \approx 52.2 \Omega \quad \text{より, 力率は } \cos \varphi = \frac{R}{Z} \approx \frac{50}{52.2} \approx 0.958,$$

最大電圧は $V_0 = I_0 Z \approx 2 \times 52.2 \approx 104 \text{ V}$ である。

これらを使って, 消費電力は

$$\frac{I_0 V_0}{2} \cos \varphi \approx \frac{2 \times 104}{2} \times 0.958 \approx 100 \text{ W} \quad \text{となる。} (\text{答})$$

5.

L に流れる複素電流の振幅 \dot{I}_{0L} および C を流れる複素電流の振幅 \dot{I}_{0C} と回路の複素電流の振幅 \dot{I}_0 との間には, $\dot{I}_0 = \dot{I}_{0L} + \dot{I}_{0C}$ の関係がある。電源の複素電圧の振幅を \dot{V}_0 とすると, L

や C に加わる複素電圧の振幅は $\dot{V}_0 - \dot{I}_0 R = \dot{V}_0 - \dot{I}_{0L} R - \dot{I}_{0C} R$ である。この複素電圧の振幅と

L や C での複素電圧の振幅が等しいから, $\dot{V}_0 - \dot{I}_{0L} R - \dot{I}_{0C} R = j\omega L \dot{I}_{0L}$ と

$\dot{V}_0 - \dot{I}_{0L} R - \dot{I}_{0C} R = -j \frac{1}{\omega C} \dot{I}_{0C}$ の2つの式が得られる。これらの式を連立して解き, 数値を代入すると,

$$\dot{I}_{0L} = \frac{\dot{V}_0}{R - \omega^2 RLC + j\omega L} = \frac{1}{30 + 40j} \dot{V}_0$$

および

$$\dot{I}_{0C} = \frac{-\omega^2 LC \dot{V}_0}{R - \omega^2 RLC + j\omega L} = \frac{-0.4}{30 + 40j} \dot{V}_0$$

となる。以上の結果から, 電源電圧の実効値 40 V をつかって, L を流れる電流の実効値は

$$\frac{40}{\sqrt{30^2 + 40^2}} = 0.8 \text{ A}, \quad C \text{ の電流の実効値は } \frac{0.4 \times 40}{\sqrt{30^2 + 40^2}} = 0.32 \text{ A} \quad \text{と計算される。} (\text{答})$$

6.

前問から

$$\dot{I}_{0L} = \frac{\dot{V}_0}{R - \omega^2 RLC + j\omega L} = \frac{R - \omega^2 RLC - j\omega L}{(R - \omega^2 RLC)^2 + (\omega L)^2} \dot{V}_0 = \frac{e^{-j\varphi}}{\sqrt{(R - \omega^2 RLC)^2 + (\omega L)^2}} \dot{V}_0$$

であるから、 L に流れる電流の実効値は $(\frac{I_{0L}}{\sqrt{2}}) = \frac{1}{\sqrt{(R - \omega^2 RLC)^2 + (\omega L)^2}} (\frac{V_0}{\sqrt{2}})$ である。

同様にして C の電流の実効値は $(\frac{I_{0C}}{\sqrt{2}}) = \frac{\omega^2 LC}{\sqrt{(R - \omega^2 RLC)^2 + (\omega L)^2}} (\frac{V_0}{\sqrt{2}})$ と得られる。

ω を変化させて $(\frac{I_{0L}}{\sqrt{2}}) = (\frac{I_{0C}}{\sqrt{2}})$ となったから、 $\omega^2 = \frac{1}{LC}$ である。このときの複素電流の振幅

$$\text{は } \dot{I}_{0L} = \frac{\dot{V}_0}{R - \omega^2 RLC + j\omega L} = -j \frac{\dot{V}_0}{\omega L} \text{ および } \dot{I}_{0C} = \frac{-\omega^2 LC \dot{V}_0}{R - \omega^2 RLC + j\omega L} = j \frac{\dot{V}_0}{\omega L} \text{ となるから、}$$

$\dot{I}_0 = \dot{I}_{0L} + \dot{I}_{0C} = 0$ である。すなわち抵抗を流れる電流はゼロとなる。(答)

7.

$t = 0$ で電源電圧 V_e は最大であるから、 $V_e = V_0 \cos \omega t$ である。 $V_e = RI_R$ の関係から、

$$I_R = \frac{V_0}{R} \cos \omega t = 20 \cos 1000t \text{ [A]} \text{ である。一方、 } I_L = I_{0L} \sin(\omega t + \alpha) \text{ を仮定すると、}$$

$V_e = L \frac{dI_L}{dt}$ から $V_0 \cos \omega t = \omega L I_{0L} \cos(\omega t + \alpha)$ の関係が満たされる必要がある。これから、

$$\alpha = 0 \text{ および } I_{0L} = \frac{V_0}{\omega L} \text{ が得られる。すなわち、 } I_L = \frac{V_0}{\omega L} \sin \omega t = 5 \sin 1000t \text{ [A]} \text{ である。}$$

以上の式から、横軸に時間 t [s]、縦軸に I_R と I_L [A]を取ってグラフにすればよい。

8.

LCR回路の共鳴角振動数は

$$\omega_0 = \frac{1}{\sqrt{LC}} = \frac{1}{\sqrt{0.5 \times 1 \times 10^{-6}}} \approx 1.41 \times 10^3 \text{ rad/s} \text{ である。(答)}$$

9.

$$\text{式 5-157 から } I_0 = \frac{V_0}{\sqrt{R^2 + (\omega_0 L - \frac{1}{\omega_0 C})^2}} = \frac{V_0}{R} = \frac{150}{5} = 30 \text{ A} \text{ である。}$$

また、力率は式 5-155 から、

$$\cos \varphi = \frac{R}{\sqrt{R^2 + (\omega_0 L - \frac{1}{\omega_0 C})^2}} = 1$$

である。これから消費電力は

$$\bar{P} = \frac{I_0 V_0}{2} \cos \varphi = \frac{150 \times 30}{2} = 2250 \text{ W} \text{ である。 (答)}$$

10.

式 5-169 から回路のインピーダンスは

$$Z = \frac{1}{\sqrt{\left(\frac{1}{R}\right)^2 + \left(\omega C - \frac{1}{\omega L}\right)^2}} = \frac{1}{\sqrt{\left(\frac{1}{5}\right)^2 + \left(300 \times 10^{-6} - \frac{1}{300 \times 0.5}\right)^2}} \approx 5 \Omega \text{ である。 (答)}$$

5章 演習問題

1.

回路を貫く磁束 $\phi = B\pi r^2$ ，回路に生じる誘導起電力 $V_e = -\frac{d\phi}{dt}$ ，流れる電流は $I = \frac{V_e}{R}$ であ

るから

$$I = -\frac{\pi r^2}{R} \frac{dB}{dt} = \frac{3.14 \times 0.1^2}{5} \times 0.1 \times 400 \times \sin(400t) \approx 0.251 \sin(400t) \text{ [A]}$$

となる。最大電流は 0.251 A である。(答)

2.

回路を貫く磁束 $\phi = BS = B_0 S \exp(-bt)$ であるから，回路に生じる誘導起電力は

$$V_e = -\frac{d\phi}{dt} = B_0 S b \exp(-bt) \text{ である。 (答)}$$

3.

磁束密度は紙面に垂直である。 $\mathbf{E} = \mathbf{v} \times \mathbf{B}$ より，長さ b の辺に沿った方向の電界はゼロ，長さ a の辺に沿った方向の電界は $E(r) = vB(r)$ と $E(r+b) = vB(r+b)$ である。電流がつく

る磁束密度は $B(r) = \frac{\mu_0 I}{2\pi r}$ および $B(r+b) = \frac{\mu_0 I}{2\pi(r+b)}$ であるから，左側の長さ a の辺での電

界 $E(r) = v \frac{\mu_0 I}{2\pi r}$ ，右側の長さ a の辺の電界 $E(r+b) = v \frac{\mu_0 I}{2\pi(r+b)}$ である。(答)

4.

回路に生じる誘導起電力は $V_e = -\frac{d\phi}{dt} = -\pi r^2 \frac{dB}{dt} = \pi r^2 a$ である。回路に生じる電界を E と

すると、 $2\pi rE = \pi r^2 a$ であるから $E = \frac{ra}{2}$ である。(答)

5.

ソレノイド内部の磁束密度は $B = n\mu_0 I$ 、したがって、ソレノイド内部の空間の磁界のエネルギー密度は $u = \frac{1}{2\mu_0} B^2 = \frac{1}{2} \mu_0 n^2 I^2 = \frac{1}{2} 4\pi \times 10^{-7} \times 200^2 \times 5^2 = 0.628 \text{ J/m}^3$ である。(答)

6.

式 5-77 から二次側の起電力の大きさは $V_2 = \frac{N_2}{N_1} V_1$ で得られるから、

$$V_2 = \frac{20}{200} \times 1000 = 100 \text{ V} \text{ である。 (答)}$$

7.

並列 LC 回路では、コンデンサの電荷は $Q(t) = Q_0 \cos(\omega t + \alpha)$ 、電流は $I(t) = \frac{dQ}{dt} = -\omega Q_0 \sin(\omega t + \alpha)$ 、角振動数は $\omega = \frac{1}{\sqrt{LC}}$ である。 $t = 0$ では、

$Q(0) = Q_0 \cos(\alpha) = 0$ および $I(0) = -\omega Q_0 \sin(\alpha) = 2 \text{ A}$ であるから、

$\alpha = -\frac{\pi}{2}$ と $Q_0 = \frac{2}{\omega} = 2 \times \sqrt{0.2 \times 10 \times 10^{-6}} \approx 2.83 \times 10^{-3} \text{ C}$ が得られる。したがって、

$Q(t) = 2.83 \times 10^{-3} \cos(\omega t - \frac{\pi}{2}) \text{ [C]}$ 、 $I(t) = 2 \sin(\omega t - \frac{\pi}{2}) \text{ [A]}$ である。なお、

$\omega = \frac{1}{\sqrt{LC}} = \frac{1}{\sqrt{0.2 \times 10 \times 10^{-6}}} = 707 \text{ rad/s}$ である。これらの式を使って、横軸に時間 t 、

縦軸に電荷 $Q(t)$ および電流 $I(t)$ をとって、グラフを描けばよい。

8.

回路を流れる電流とコンデンサの電荷の間には、 $IR + \frac{Q}{C} = -L \frac{dI}{dt}$ の関係が成り立つ。

$I = \frac{dQ}{dt}$ の関係を使うと、電荷に対する微分方程式 $L \frac{d^2 Q}{dt^2} + R \frac{dQ}{dt} + \frac{1}{C} Q = 0$ が得られる。こ

の方程式を解くために、 $Q \propto e^{z t}$ の時間依存性を仮定する。ここで、 z は時間によらない定数である。これを微分方程式に代入すると $Lz^2 + Rz + \frac{1}{C} = 0$ の関係が得られる。この関係を満

たす z は、 $z = \frac{-R \pm \sqrt{R^2 - 4L/C}}{2L}$ である。

条件 $\frac{4}{LC} \gg (\frac{R}{L})^2$ より, $\sqrt{R^2 - 4L/C} = L\sqrt{(\frac{R}{L})^2 - 4\frac{1}{LC}} \approx jL\sqrt{\frac{4}{LC}}$, ここで, $j = \sqrt{-1}$ で

ある。したがって, 解として, $e^{-\frac{R}{2L}t} e^{j\frac{t}{\sqrt{LC}}}$ と $e^{-\frac{R}{2L}t} e^{-j\frac{t}{\sqrt{LC}}}$ が得られる。微分方程式の一般解は, こ

れら2つの解の線形結合であるから, $Q(t) = e^{-\frac{R}{2L}t} (Ae^{j\frac{t}{\sqrt{LC}}} + Be^{-j\frac{t}{\sqrt{LC}}})$ である。電荷 $Q(t)$ は実

数であるから, 定数 A と B の間には $B = A^*$, すなわち, 実数 a, α を使って, $A = ae^{j\alpha}$ およ

び $B = ae^{-j\alpha}$ と表せる。これから, $Q(t) = ae^{-\frac{R}{2L}t} \cos(\frac{t}{\sqrt{LC}} + \alpha)$ である。 $t = 0$ で

$Q(0) = a \cos \alpha = Q_0$ である。また, この値がコンデンサに蓄えられる電荷の最大値であるか

ら, $\alpha = 0$ である。したがって, $Q(t) = Q_0 e^{-\frac{R}{2L}t} \cos(\frac{t}{\sqrt{LC}})$ である。(答)

電流は電荷を時間微分して得られるから,

$$I(t) = -Q_0 e^{-\frac{R}{2L}t} \left[\frac{R}{2L} \cos(\frac{t}{\sqrt{LC}}) + \frac{1}{\sqrt{LC}} \sin(\frac{t}{\sqrt{LC}}) \right] \approx -Q_0 \frac{1}{\sqrt{LC}} e^{-\frac{R}{2L}t} \sin(\frac{t}{\sqrt{LC}}) \text{ [A]}$$

となる。(答)

9.

$0 \leq t < T$ では, 時刻 t の電圧は $V(t) = \frac{2V_0}{T}t - V_0$ と書ける。したがって,

$$\overline{V^2} = \frac{1}{T} \int_0^T V^2 dt = \frac{1}{T} \left(\frac{2V_0}{T}\right)^2 \int_0^T \left(t - \frac{T}{2}\right)^2 dt \text{ である。積分変数を } u = t - \frac{T}{2} \text{ に選ぶと,}$$

$$\int_0^T \left(t - \frac{T}{2}\right)^2 dt = \int_{-\frac{T}{2}}^{\frac{T}{2}} u^2 du = \frac{1}{3} \left[\left(\frac{T}{2}\right)^3 - \left(-\frac{T}{2}\right)^3 \right] = \frac{2}{3} \left(\frac{T}{2}\right)^3 \text{ であるから,}$$

$$\overline{V^2} = \frac{1}{T} \left(\frac{2V_0}{T}\right)^2 \frac{2}{3} \left(\frac{T}{2}\right)^3 = \frac{V_0^2}{3} \text{ である。これから, 実効値は } \sqrt{\overline{V^2}} = \sqrt{\frac{V_0^2}{3}} = \frac{V_0}{\sqrt{3}} \text{ となる。 (答)}$$

10.

式 5-149 より直列 LCR 回路を流れる電流は $I = \frac{V_0}{\sqrt{R^2 + (\omega L - \frac{1}{\omega C})^2}} \cos(\omega t - \varphi)$ である。

したがって, $\omega L = \frac{1}{\omega C}$ のとき電流の振幅が最大になる。最大の振幅にするには,

$$L = \frac{1}{\omega^2 C} = \frac{1}{300^2 \times 3 \times 10^{-6}} = 3.70 \text{ H に選べばよい。 (答)}$$

なお、 L をこの値に選べば、回路を流れる電流の実効値は $\frac{1}{R} \frac{V_0}{\sqrt{2}} = \frac{1}{100} \times 100 = 1 \text{ A}$ である。

第5章 ワークシート問題

1.

円形コイルを貫く磁束は、 θ の角度では $\phi = B\pi a^2 \sin \theta$ である。回転の速度は一定とする
と、その角速度は $\frac{d\theta}{dt} = \frac{\theta}{T}$ である。 $\frac{d(\sin \theta)}{dt} = \cos \theta \frac{d\theta}{dt}$ から、誘導起電力は

$$V_e = -\frac{d\phi}{dt} = -\pi a^2 B \cos \theta \frac{d\theta}{dt} = -\pi a^2 B \cos \theta \cdot \left(\frac{\theta}{T}\right) [\text{V}] \text{ となる。 (答)}$$

2.

正方形の回路の二辺が x 軸に平行、他の二辺が y 軸に平行である場合を考える。この場合には次のようになる。この回路が微小時間 dt の間に x 方向に vdt だけ移動する。したがって、この間に回路を貫く磁束の変化は $d\phi = b(x+a)vdt - bxvdt = ba^2vdt$ である。これから、

$$\text{回路に生じる誘導起電力は } V_e = -\frac{d\phi}{dt} = -bva^2 [\text{V}] \text{ である。 (答)}$$

3.

導体棒から距離 r の位置の磁束密度はアンペールの法則から、 $2\pi rB = \mu_0 I$ より求まる。すなわち、 $B = \frac{\mu_0 I}{2\pi r}$ である。この磁界中を導線が速度 v で動くとき式 5-30 から導線中に生じる

電界は $E = vB = v \frac{\mu_0 I}{2\pi r}$ である。時刻 t での導線の速度は $v(t) = gt$ 、導体棒からの距離は、

$t = 0$ で r_0 とすると、時刻 t では $r(t) = r_0 - \frac{1}{2}gt^2$ である。したがって、

$$E = \frac{\mu_0 I}{2\pi(r_0 - gt^2/2)} gt [\text{V/m}] \text{ である。 (答)}$$

4.

ソレノイド内部にできる磁束密度は $B = n\mu_0 I$ である。したがって、 $a < r$ のときは、円形コイルを貫く磁束は $\phi = BS = n\mu_0 I \pi a^2 = n\mu_0 \pi a^2 I_0 \frac{t}{T}$ である。これから、誘導起電力は

$$V_e = -\frac{n\mu_0 \pi a^2 I_0}{T}, \text{ 円形回路の電界は } E = \frac{V_e}{2\pi r} = -\frac{n\mu_0 a^2 I_0}{2rT} [\text{V/m}] \text{ である。 (答)}$$

$a > r$ のときは、円形コイルを貫く磁束は $\phi = n\mu_0 I \pi r^2 = n\mu_0 \pi r^2 I_0 \frac{t}{T}$ である。したがって、誘導起電力は $V_e = -\frac{n\mu_0 \pi r^2 I_0}{T}$ ，円形回路の電界は $E = \frac{V_e}{2\pi r} = -\frac{n\mu_0 r I_0}{2T}$ [V/m] である。(答)

5.

2つのコイルのエネルギーは $U = \frac{1}{2} L_1 I_1^2 + \frac{1}{2} L_2 I_2^2 + M I_1 I_2$ であるから、この式に値を代入すると $U = 5 \times 1^2 / 2 + 2 \times 2^2 / 2 + 0.5 \times 1 \times 2 = 7.5 \text{ J}$ である。(答)

6.

同軸ケーブルの中心軸から距離 r の位置の磁束密度は $r < a$ で $B = \frac{\mu I r}{2\pi a^2}$ ， $a < r$ で

$B = \frac{\mu_0 I}{2\pi r}$ である。ここで、導体の透磁率を μ とした。ケーブルの長さを l とする。

(1) 内側の導体円柱と外側の導体の間に同軸ケーブルの軸方向に平行に幅 $b - a$ 、長さ l の長方形の面を考える、電流 I がつくる磁束密度はこの長方形に垂直である。したがって、

この長方形を貫く磁束は $\phi = \int_S B dS = \int_a^b \frac{\mu_0 I}{2\pi r} l dr = \frac{\mu_0 I l}{2\pi} \int_a^b \frac{dr}{r} = \frac{\mu_0 I l}{2\pi} \log\left(\frac{b}{a}\right)$ である。一方、

導体円柱内の磁束は $\phi_0 = \int_0^a \frac{\mu I r}{2\pi a^2} l dr = \frac{\mu I l}{4\pi}$ である。これらの結果を使うと、ケーブル

内の自己インダクタンスは $L = \frac{\phi + \phi_0}{I} = \frac{\mu_0 l}{2\pi} \log\left(\frac{b}{a}\right) + \frac{\mu l}{4\pi}$ であることがわかる。単位長

さ当たりの自己インダクタンスは $\frac{1}{2\pi} \left[\mu_0 \log\left(\frac{b}{a}\right) + \frac{\mu}{2} \right]$ である。(答)

(2) ケーブル中に蓄えられるエネルギーは、(1)の結果を使って

$U = \frac{1}{2} L I^2 = \frac{l I^2}{4\pi} \left[\mu_0 \log\left(\frac{b}{a}\right) + \frac{\mu}{2} \right]$ [J] が得られる。これを単位長さ当たりのエネルギー

に直すと $\frac{U}{l} = \frac{l I^2}{4\pi} \left[\mu_0 \log\left(\frac{b}{a}\right) + \frac{\mu}{2} \right]$ である。(答)

7.

コンデンサの電荷の時間変化を記述する方程式は $L \frac{d^2 Q}{dt^2} + \frac{Q}{C} = 0$ である。すなわち、

$\frac{d^2 Q}{dt^2} = -\frac{1}{LC} Q$ である。時刻 $t = 0$ でコンデンサの電荷は最大値 Q_0 であるから、 $\omega = \frac{1}{\sqrt{LC}}$

とすると、方程式の解は $Q = Q_0 \cos \omega t$ である。

$$(1) \quad \omega = \frac{1}{\sqrt{LC}} = \frac{1}{\sqrt{10^{-11} \times 2 \times 10^{-3}}} \approx 7.07 \times 10^6 \text{ s}^{-1} \quad (\text{答})$$

$$(2) \quad I = \frac{dQ}{dt} = -\omega Q_0 \sin \omega t \text{ である。 } Q_0 = CV = 10^{-11} \times 12 = 1.2 \times 10^{-10} \text{ C であるから, 電}$$

流の最大値は $\omega Q_0 = 7.07 \times 10^6 \times 1.2 \times 10^{-10} \approx 8.48 \times 10^{-4} \text{ A}$ である。(答)

8.

$$\omega_0 = \frac{1}{\sqrt{LC}} = \frac{1}{\sqrt{20 \times 10^{-6} \times 5 \times 10^{-9}}} \approx 3.16 \times 10^6 \text{ Hz} \quad \Delta\omega = \frac{R}{L} = \frac{10}{20 \times 10^{-6}} = 5 \times 10^5 \text{ Hz}$$

であるから, 式 5-163 より $Q_0 = \frac{\omega_0}{\Delta\omega} \approx \frac{3.16 \times 10^6}{5 \times 10^5} \approx 6.32$ である。(答)